

研究分野のキーワード：体育，授業づくり，教材，現職教育

研究紹介

想像してみてください。

登校時。子どもたちはランドセルの中に教科書やノート等の学用品以外に詰め込んでくるものがあります。そして、下校時。子どもたちはランドセルの中に連絡帳や筆箱などの学用品以外に持ち帰るものがあります。それは何でしょう。

「教師が体育の授業を構想する時、教師の側だけではなく、常に子どもの側に立つことも求められます。そして、体育授業では、子どもにとっても教師にとっても一生に一回しかないこと（一回性），二度と同じことはできないこと（再現不可能性），子どもも教師も代わりがきかない，誰とも変えることができない存在であること（固有性・個別性）を忘れてはいけません。」ということをし、15年間の小学校現場から教えていただきました。

現在は、これまでの小学校現場の経験を大切にして、体育の目標論（なぜ、学校で体育を学ぶのか），内容論（体育は何を学ぶ教科なのか），方法論（どのように体育指導をするのか）の3つの柱で研究を進めています。

また、学内における大学の授業や学生指導，学外における現職教育において、「よい授業」から「味のある授業」への転換を伝えています。後にも先にも今を大切にしたい授業。「自分がないもの」を求めるのではなく、「自分にしかないもの」を求める授業。その実現には、単なる思いつきではなく、研究の成果を押さえた「体育の目標論・内容論・方法論」の学びが手助けしてくれるものと信じています。体育は教科の中で唯一、教科書がありませんから、教師の創意工夫が大いに期待されていると言えるでしょう。

教師の創意工夫には「視点」が必要です。「視点」には、どこからみるのかということ（立脚点）と、何をみるのかということ（注視点）があります。いずれも体育授業の改善点となり、日々研鑽を積むことで、「見えるもの」だけではなく、「見えないもの」も見えてくるのではないかと考え、教員養成及び教員研修の中核的な内容として考えています。

再び、想像してみます。「もしかしたら、子どもたちは『今日の体育でうまくできるかな』という不安、『絶対挑戦してやるぞ』という意気込みを一緒に詰め込んで登校しているかも。」「もしかしたら、子どもたちはできなかった悔しさをランドセルの中に入れて下校しているかもしれない。なぜなら、自分も子ども時代にそうだったから。」と。

体育の授業づくりは「子ども時代の自分」に逢える場所かもしれません。そして、「未来の自分」が「今の自分」へエールを送る場所かもしれません。味のある体育授業の創出を目指してみませんか。教師になりたい方々。お待ちしております。